イギリス文化振興視察報告

平成23年9月2日から8日間にわたって関西経済同友会 歴史文化振興委員会の視察団に参加し、イギリスの文化振興の現状を視察した。

文化は活力の源泉であるというだけでなく、自己の存在をかけて必須不可欠なものとして真正面から文化に取り組んでおり、関西・大阪の地域活性化のためにも極めて重要な手掛かりが得られた。

大阪21世紀協会　理事長 **堀井良殷**

エディンバラ市街

文化にかける思いの強さは“本気“

イギリスのなかでも北部のスコットランドが文化振興にかける思いは生半可なものではない。それこそ本気で真正面から取り組んでいる。その理由は自分（スコットランドという地域と民族）がここにいるぞという強烈な自己存在の主張である。

イングランドとスコットランドでは歴史や文化、つまり地域のあり方そのものが違っており、スコットランドはつい最近大幅な自治権を獲得しさらに完全独立をめざしている。その誇りをかけてスコットランドここにありという叫びを、イギリス国内をはじめ世界に向かって発信しているのだ。これは日本においても西日本の首都として際立った個性をもつ大阪の在り方と共通点があり、その文化振興策は参考にすべきだと思った。

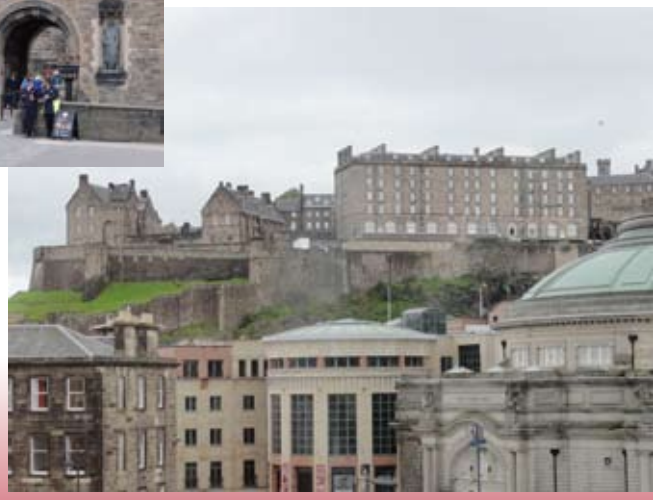
わずか人口510万人のスコットランドが公共文化団体に投ずる年間予算額は112億円である。そのうち75億は国と地方政府から支出されている。しかも付加価値税20%の財政状況においてでも国民の理解を得て支出されている。日本の事業仕訳のやり方とはあまりにもかけ離れた考え方だが、こちらのほうがヨーロッパでは常識であり、文化を真っ先に効率化の槍玉にあげるような社会に未来は開けないと実感させられた。

スコットランド地域の納税額だけでは財政を賄いきれないため、今は交付税をイングランドから貰っているが、たとえそれが貰えなくなっても完全独立をめざすのだという。まさに「団子よ

各地から集まったアーティストたち

エディンバラ城と城の入口
この広場で有名なミリタリー・タトゥが開かれる

エディンバラ市街には観光客が
世界から押し寄せる



り花」である。民族の自立と誇りへの意欲は必死の趣さえ感じる。だからその基盤をなす伝統と文化は社会のあらゆる場面で絶対不可欠であり、振興し、次世代に伝える努力をしている。

文化は投資と考える

“文化への支出は投資である”という言葉が繰り返し聞かれた。

エディンバラという中世の街並みを残すスコットランドの首都も、ただそれだけでは単なる古いくすんだ北部の一地方都市にすぎない。悪くすれば廃墟の街にさえなりかねない。そこでエディンバラ・フェスティバルを立ち上げた。一年を通じて12の芸術と文化の祭典がくり広げられ、人口48万人の街に年間350万人の観光客が押し寄せ経済効果は2億4500万ポンド（約290億円）、加えて5420件の雇用を創出し、市民が誇りを持つことによってクオリティ・オブ・ライフ（生活の質）はイギリスの1位にランクされている。しかも国際的知名度が高く世界各国から2万人のアーティストが参加、メディア関係者が2000人規模で集まり、さらに有望なアーティストを発掘しようと1000人ものプロデューサーや映画演劇のディレクターが集結する。

住民の94%がフェスティバルによって生活水準が上がり子供の教育に寄与していると回答、多くの文化ボランティアが参加し、地域や社会への貢献力を強めている。

権力は文化に直接かかわらない！“アームズレングスの法則”

ナチスが文化を権力基盤強化に使ったのは有名だが、ヨーロッパではその教訓から権力、つまり政治や行政は直接文化を手づかみしないという原則が徹底している。アームズレングスの法則、手の腕の長さだけ距離感をもって接するのである。文化は人類6000年の叡智と感性の集積であり、それを享受し何らかの創造を加えて次世代に引き継ぐ責任が現世代にはあり、そのために税金が一定割合投入されるべきであることは当然であるが、それをどう活かすかは民間人や専門家に任せている。いわゆる官はカネは出すが口は出さない鉄則があるのだ。

アーツカウンシルと文化宝くじ

“あらゆる人に素晴らしい芸術を”“次世代に伝統と文化を引き継ぐために”という目的で中心的な役割を果たしているのはアーツカウンシルである。行政から独立した組織で民間の専門家集団が携わる。文化を支援し、育成、次世代への継承を推進し、さらに評価と検証を厳正に行う。

イギリスのアーツカウンシルは1946年からの長い歴史があり、財源は政府と自治体の助成金、企業団体の寄付、個人献金などからなる。いまひとつ大きな財源が宝くじである。市民の幅広い関心を呼び起こし、寄付文化を面白く興味をもって根付かせる一つの方法ではないだろうか。

視察から得られたヒントを生かすとすれば、まず大阪の文化による活性化のため、民間主導によるアーツカウンシルの設立を強く推したい。そして、その財源として文化宝くじを提案したい。

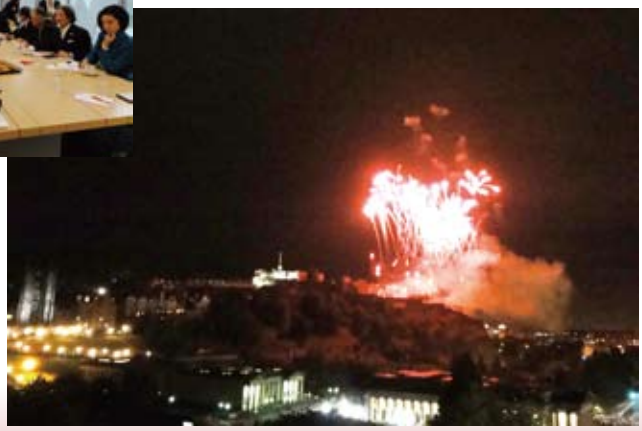
大阪キャッスル・フェスティバル

世界の注目を“大阪ここにあり”として集めるには、まず文化である。そして経済が両輪としてまわってゆく。そのための文化資産はたっぷりある。活かしていないだけだ。例えば、1500年都市のエッセンスが重層的に蓄積されている上町台地の大阪城エリアは世界の注目を集めるに足る場所であり、名だたるヨーロッパの歴史都市と比べても遜色はない。10年でエディンバラ並みの成果をめざすのもあながち夢ではない。目標を掲げ、実現への手順を定め、みんながその気にさえなれば出来ることなのだ。出来るとわかっていて、しないというのでは情けない。平成24年のたんなる初夢に終わらせないために、是非とも実現へ一歩踏み出してゆきたい。

バグパイプ演奏

関係者へのヒアリング風景
（クリエイティブ・スコットランド）

スコットランド国立美術館での美術展示


フィナーレはエディンバラ城での花火とオーケストラの競演